

「イスラム国」事件に見る本質

お屠蘇機嫌も覚めやらぬ新年早々、「イスラム国」による日本人人質殺害事件の衝撃が、日本人の気持ちの上に重くのしかかった。現地からひっきりなしに送られてくる生々しい映像が連日テレビで映し出され、これまで想像もしなかった残虐行為を見て、政府を始め日本中が取り乱し、うろたえた。

これは、日本人がアラブ固有の文化などの知識や情報に疎いというより、現地の空気を体感的に感得出来ないことから、不安と恐怖が倍加されたものだと言える。日本人とは異なる乾いた砂漠の文化や風習の中で生きてきた民族、その一方で一分の隙もなくぎっしり建てられたアラブ的「向う三軒両隣」感覚と、それらに漂う臨場感を知らなさ過ぎることが不安と恐怖心を煽った。だが、現場に踏み込まずして独特のアラブの匂い漂う雰囲気と臨場感はとても分かるものではない。それをどう感じ、受け止めるかによって、そこに身を置く危険の察知度も大きく変わるものだ。

1967年私は第3次中東戦争直後で戒厳令が布かれたアンマン市内で、突然ヨルダン軍部隊に身柄を拘束された。その数日前スエズ運河で現地警察に拘留された苦い経験がありながら、当時はまだアラブの風土について警戒心と臨場感が欠けていた。その後度々危険な戦乱の地に足を踏み入れることによって、ぼんやりではあるが少しずつ臨場感が研ぎ澄まされ、危険の匂いが感知出来るようになった。今度の事件では、アラブ特有の臨場感を身体で知るジャーナリストが、敢えて危険を承知のうえでその渦中に飛び込んだ拳句に、不運にも過激派集団「イスラム国」の罠にはまってしまった。

事件後ある有力政治家がその行動について「蛮勇」と極めつけ一方的に非難した。日頃自ら安全地帯に身を置き言葉だけで人を誹謗することは簡単だ。しかし、崇高な目的遂行のために、敢えて危険を顧みず勇気ある行動を取った信念の人に対して、真剣に説得する気もなく、安易に電話やメールなどで説得したつもりになったところで、彼らが自らの志を翻すようなことは考え難い。難民救済のような崇高なボランティア活動に真摯に身を賭している人たちの行動を、一言で「蛮勇」などと決め付け非難すること自体、あらぬ誤解を生み、善意を曲解させる環境を醸成し、同じような事件再発の伏線となるのだ。

現場の空気を知らなければ、いくら机上で知識を積み重ねたところで、所詮本質は分かるものではない。現場へ何度も足を運んでこそ、少しずつではあるが形は見えてくる。現場で学ぶことは多く尊い。